

由美が帰宅すると、玄関には何足もの靴が乱雑に脱ぎ捨ててある。今夜も同級生達は大勢が押しかけ、美貌の母娘をいたぶる淫虐なパーティが繰り広げられるのだ。廊下の先のリビングからは賑やかな声が漏れ出ている。リビングのドアは半分ほど開いており、中の明るい照明の明かりが廊下に漏れ出ている。壮絶な光景が由美の目に飛び込んできた。D組の男子生徒も女子生徒も、全裸に剥かれて立たされている母親に群がっている。景子は後ろ手に縛られていた。縄で胸を上下に厳しく縛られ、豊満な乳房がよりいっそう前に突き出ている。景子の唇を左右に挟んだ二人の男子生徒が交互に吸い付いては舐め、こじ開けた唇から舌を吸い上げ、綺麗に並んだ歯列さえも舐めている。景子はきつく舌を吸われ、眉間に皺を寄せて美しい顔をゆがめ、苦しげな表情をしているのだが、それは強引なキスだけではない。乳首の根元に紐が幾重にもきつく巻き付けられ、その紐を女子生徒達がキャッキヤとはしゃぎながら強く引っ張っている。乳首が引き伸ばされ、上下を縛り上げられ

た乳房も変形している。それほどに少女たちは容赦なく紐を引っばっているのだ。

「景子のおっぱいって弾力がまだまだあるよね。」

「プリプリしていてとても38歳には見えないわ。まだ二十代の胸だよ、これは」

女子生徒達が紐を上下に引っ張り、景子の乳首は限界まで引き伸ばされているのだ。

景子の前にしゃがんだひとりの女子生徒は、皮を剥いたバナナをあてがってゆっくりと押し沈めていた。景子は脚を軽くひらいており、剥き身のバナナを受け入れる従順な意志を見せている。双臀を何度もしたたかに叩かれた上での強制させられたバナナの埋没作業の受け入れであった。

「景子って本当にバナナが好きだよ。もうこれで十本目だよ。涎をたらしながらおいしそうに食べるよね」

「由美の母親だけはあるよね。親子して淫乱な破廉恥奴隷よね」

景子の淫裂からはトロツとした愛液がじくじくとしみだし

て膣穴へのバナナの挿入をスムーズにしている。

「もう、呑みこんじゃった。お尻のバナナは準備できた？」

景子の後ろにも二人の女子生徒がしゃがみ込んでいる。悩ましいほどにむっちりした尻たぶを割り裂いて、すみれ色のアヌスに強引にバナナを押し込んでいるのだ。

「こっちもできたわ、すっかり呑みこんだよ」

「じゃあ、景子、お尻を叩いたらスパッと切り落とすのよ」

男子生徒から唇を舐め回され舌を強く吸われている景子はうなずいた。

沙也加が景子の尻たぶを叩く。合図だった。景子の内股に力が入る。バナナを膣と肛門の括約筋で同時に切り落とす調教が始まってすでに一時間がたとうとしていた。景子の膣穴もアヌスも感覚が麻痺していた。バナナは繰り返し挿入され、景子は休むまもなくバナナきりの珍芸を娘の同級生たちに教え込まれるのだ。

「早く切り落とすな！」

「ぐずぐずしないで切りなよ」

乳首の紐が強く引かれた。景子はバランスを崩しよろめいた。景子の後ろにしゃがんだ沙也加がよろめいた景子を叱咤する。前にしゃがんだ瑤子が景子の陰毛をつまんで強く引っ張る。景子は男子生徒に強引なキスを強要されながら呻いた。

景子の足もとには折れたバナナがいくつも転がっていた。

「ママさんよお、そんな大きな尻しているくせにもう音を上げるのかよう。まだまだバナナはいっぱい残っているぜ」杉本哲也がバナナの皮を剥きあげて、それで景子の臀部をぴたぴたと叩く。

「ママさんがいやがったら、由美にさせようぜ。景子ママの代わりに由美のアヌス調教だ」

帰宅した由美に哲也が顔を向けた。

「ご、ごめんなさい……このお尻はまだまだ張り切っているわ。」

景子はむっと力を入れた。景子の首筋に汗が光った。

「ママの代わりに私のお尻の調教をしてください……ママはもう休ませてあげてください。」

由美はすばやく制服を脱ぎ去ると、丸裸になって母親の横に並んだ。